

夏目漱石著「三四郎」新潮文庫、新潮社 1948年5月25日刊を読む

1. やがて珈琲が出る。一人が椅子を離れて立った。与次郎が烈しく手を敲くと、他のものも忽ち調子を合わせた。
2. 立ったものは、新しい黒の制服を着て、鼻の下にもう髭を生やしている。背が頗る高い。立つには恰好の好い男である。演説めいた事を始めた。
3. 我々が今夜此处へ寄って、懇親の為に、一夕の歓をつくすのは、それ自身に於て愉快な事であるが、この懇親が単に社交上の意味ばかりでなく、それ以外に一種重要な影響を生じ得ると偶然ながら気が付いたら自分は立ちたくなかった。この会合は麦酒に始まって珈琲に終わっている。全く普通の会合である。然しこの麦酒を飲んで珈琲を飲んだ 40 人近くの間は普通の人間ではない。しかもその麦酒を飲み始めてから珈琲を飲み終わるまでの間に既に自己の運命の膨張を自覚し得た。
4. 政治の自由を説いたのは昔の事である。言論の自由を説いたのも過去の事である。自由とは単にこれ等の表面にあらわれ易い事実の為に専有されべき言葉ではない。吾等新時代の青年は偉大なる心の自由を説かねばならぬ時運に際会したと信ずる。
吾々は旧き日本の圧迫に堪え得ぬ青年である。同時に新しき西洋の圧迫にも堪え得ぬ青年であるという事を、世間に発表せねばならぬ状況の下に生きている。新しき西洋の圧迫は社会の上に於ても文芸の上に於ても、我等新時代の青年に取っては旧き日本の圧迫と同じく、苦痛である。
5. 我々は西洋の文芸を研究する者である。然し研究は何処までも研究である。その文芸のもとに屈従するのは根本的に相違がある。我々は西洋の文芸に囚われんが為に、これを研究するのではない。囚われたる心を解脱せしめんが為に、これを研究しているのである。この方便に合せざる文芸は如何なる威圧の下に強いらるるとも学ぶ事を敢てせざるの自信と決心を有している。
6. 我々はこの自信と決心とを有するの点に於て普通の人間とは異っている。文芸は技術でもない、事務でもない。より多く人生の根本義に触れた社会の原動力である。我々はこの意味に於て文芸を研究し、この意味に於て如上の自信と決心とを有し、この意味に於て今夕の会合に一般以上の重大なる影響を想見するのである。
7. 社会は然しく揺きつつある。社会の産物たる文芸もまた揺きつつある。揺く勢に乗じて、我々の理想通りに文芸を導くためには、零碎なる個人を団結して、自己の運命を充実し発展し膨脹しなくてはならぬ。今夕の麦酒と珈琲は、かかる隠れたる目的を、一步前に進めた点に於て、普通の麦酒と珈琲よりも百倍以上の価ある貴き麦酒と珈琲である。

P170 ~ 171

[コメント]

知識人の苦悩と知識人の果たすべき役割が、この漱石の文章からよくわかる。

— 2012年5月13日 林 明夫記—